

非接触と「ふれる」こと

リモートワークが緊急時のやむを得ない選択ではなく、普通の働き方として認知されるようになりました。職場や周りの環境との接触の機会が大幅に削られています。

タッチレス操作パネルや非接触スイッチは、医療・介護の現場や食品工場などで次々と導入され、顔認証による自動ドアやセキュリティゲートもマンションや公共施設で取り入れられるようになっていきます。

当然、リモートワーク関連や非接触デバイスを扱う企業の業績は伸び、株価の伸びも注目されています。日興コーディアル証券は非接触ビジネス関連株を組み合わせた、通称「ゼロ・コンタクト投資信託」を発売し、運用成績も好調のようです。

ウィズコロナ時代のキーワードのひとつは「非接触」と言っても良いでしょう。

ヨーロッパで長い中世が終わり、「近代的な個人」という人間像が確立したとき、「他人と濃厚に接触することを不快に思う人間」が誕生したことを意味していたとも言われています。大皿によそられた肉の煮込みに、みなで手を突っ込んで食事をする中世の世界からの脱却です。今回のコロナ禍で大きく進んだ非接触の流れは、この文明化のプログラムの最後の一手なのかもしれません。

■ 『デカメロン』の伸びやかさとの違い

以前、当コラムで、中世からの脱却にペストが大きな役割を果たしたことを、『デカメロン』を通してご紹介しました。14世紀中ごろ、ヨーロッパを席卷するペストの難を逃れようと、フィレンツェ郊外の別荘に集まった男女が、ペスト禍でふさぎ込んでいてもしょうがないと、それぞれ好き勝手に作り上げた物語を1日に1話ずつ語っていくのが『デカメロン』の物語です。全体に妙に明るい雰囲気醸し出しており、これに触発されたボッティチェリが「ビーナスの誕生」を描いたように、デカメロンはルネサンスのうねりへとつながっていきました。それは単なる中世の否定ではなく、新たな文化の創造の物語でもありました。

しかし「非接触」の流れは、『デカメロン』のもたらした伸びやかさとは正反対のもののように感じます。わたしは、「非接触」が社会の「デフォルト」になってしまうことは、果たして手放しで良いことなのかとも思っていました。

そんななか、「接触する」ことについて、みずからの研究をもとに考察をめぐらせた『手の倫理』（伊藤亜紗著 講談社選書メチエ）を興味深く読みました。著者は少壮の美学研究者で、5年前に出版された『目の見えない人は世界をどう見ているのか』（光文社新書）は、大きな反響を呼びました。わたしも同書を読んで、まさに蒙を啓かれた思いがしたものです。目の見えない人に寄りそってものを考えるなどということではなく、およそ人が生きて世の中をとらえるとは、どういうことかを知らしめてくれる、良書でした。

さて、著者はこの最近著で、「さわる」ことと「ふれる」ことを分けて考えることから始めます。「さわる」ことは物としての特徴や性質を確認したり、味わったりすることであるのに対し、「ふれる」ことは人との相互作用が含まれています。そこにいのちをいつくしむような、人間的なかわりがある場合には、その行為は「ふれる」であり、それは「ふれ合い」に通じていきます。

伊藤さんは、コロナ禍の非接触の流れを指して、次のように述べています。

もしかしたら私たちは今「さわる」を避けようとして「ふれる」まで捨ててしまうような、そんな「産湯とともに赤子を流し」つつある時代に生きているのかもしれない。

■ 「ふれる」ことを取り戻す

伊藤さんの話は、研究成果や実体験を交えて行きつ戻りつするタイプの論の進め方で、決して抽象論に走るものではありません。そこで彼女の考えをそのまま追うことはここでは避けて、わたしが感銘を受けた箇所のピックアップにとどめたいと思います。

海外滞在から帰国して、伊藤さんが一番違和感を覚えたのが「多様性キャンペーン」だったそうです。街中をおおう「多様性」という言葉と、実態として進んでいる分断を見ると、誰もが演技をしているように見えてゾットしたと述懐しています。言葉だけの「多様性」ならば、「それぞれの領分を守って、お互い干渉しないようにしましょう」というメッセージになりかねません。多様性は不干渉と表裏一体で、そこから分断までは、ほんの一步なのです。あの人は視覚障害者なのだからこういうケアをしておこう、そのようにラベリングをしておけば、その時々細やかな気遣いは不要で、社会全体としては「安心」を手に入れることができる。その安易さに伊藤さんは違和感を覚えるのです。

「さわる」と「ふれる」の区別でいうと、「さわる」対象として障害者をとらえ、うまくコントロールしようとするのがラベリングです。しかし障害を持つ人はいつでも障害者なわけではありません。家に帰ればふつうの父親かもしれないし、自分の詳しい話題になれば、介助してもらっていた人に対して先生になることもあるでしょう。

多様な側面を持つその人に「ふれる」ためには、障害者というくりに安心するのではなく、その都度の振る舞いに「信頼」を寄せることが必要なのだと、著者は述べます。

お年寄りの出入りを自由に行っているグループホームの例などを挙げて、著者は信頼によって、人と「ふれる」関係を築いていく方向性を示しています。

ウィズコロナの時代、「安心」が優先されるのは当然ですが、それが嵩じると「信頼」を排除して、ラベリングに頼る傾向が増えることは、容易に想像できます。「接触」という問題からやや離れてしまいましたが、「ふれる」という言葉で表される、相互交流や、それを可能にする「信頼」について、コロナ禍を理由にないがしろにしていないか、私たちは問うてみる必要があるのではないのでしょうか。 (所長 瀬戸 英晴)